2016 年度研究科プロジェクト「人間社会に笑いが存在する理由」

活動成果報告書

代表：佐金　武

1. プロジェクトの概要

本プロジェクトの趣旨は、哲学と心理学の知見を駆使し、笑いとユーモアに関する学際的研究を通じて、人間の本性の理解に努めることである。プロジェクトにかかる研究費用は研究科長裁量経費からの 40 万円を見込み、共同研究体制として下記のメンバーをプロジェクトの構成員とする。

山 祐嗣　　文学研究科・教授（心理学）
小原 漱斗　文学研究科・前期博士課程（心理学）
仲原 孝　　文学研究科・教授（哲学）
高野 保男　文学研究科・前期博士課程（哲学）
新居 佳子　文学研究科・UCRC 研究員
佐伯 大輔　文学研究科・准教授（心理学）
高梨 友宏　文学研究科・教授（哲学）
大畑 浩志　文学研究科・前期博士課程（哲学）
佐金 武　　文学研究科・講師（哲学）* プロジェクト代表
（公募書類受領順、敬称略　*HP 記載順）

哲学カフェやシンポジウムなどの市民交流の場も積極的に活用し、研究の成果を広く一般に発信する。

2. 活動の成果

ここでは、本プロジェクトの活動の 4 つの成果（大空小学校スペシャル授業、京都大学×大阪市大・文学研究科「哲学カフェ」、文学研究科オープン・ファカルティ「参加型研究紹介」、文学研究科主催シンポジウム「笑いをめぐるシンポジウム」）について報告する。

2.1 大空小学校オープン授業「ひとはなぜ笑うのか」

平成 28 年 10 月 20 日（木）大阪市立大空小学校にて、「ひとはなぜ笑うのか：ユーモアが明かす人間のいのちのなぞ」と題して、佐金武・講師（大阪市立大学大学院文学研究科）が小学生を対象とするオープン授業を実施した。この授業の本プロジェクトにとっての目的は、笑いとユーモアというごくありふれた現象について生徒とともに考えることにより、本研究テーマの面白さや意義を広く一般市民に伝え、高等教育における勉学や研究の重要性について、初等教育の段階から理解を深めてもらうことにあった。

その授業の内容は、(i) ユーモアの研究が人間の本性（の少なくとも一つの側面）を明らかにする有効な視座となりうること、(ii)「何がユーモアをもたらすのか（ユーモアの発生条件)」については様々な見解やアプローチがありうること、また（iii)「ユーモアは何のために存在するのか（ユーモアの存在理由)」ということも興味深い問題を提起することを理解したうえで、ありふれた笑いという現象に対する素朴な「ギモン」を喚起するというものである。小学生対象の授業であるため、専門用語や理解が難しいと思われる言葉を極力排し、アクティブラーニングも積極的に取り入れる一方、アカデミックな議論のレベルをなるべく落とさない工夫も試みられた。

参加した生徒は総じて講師が当初期待した以上に内容の理解を深め、子どもらしい柔軟な発想で様々なギモンを心に抱いたようである。以下、授業後に行われた振り返りでの生徒のコメントの一部を整理・抜粋する。

- 「ユーモア」という言葉を知った。
- これまで考えたことはなかったが、ユーモアについて楽しく学べた。
- 動物には笑顔をつくる表情筋が十分に発達していないことが分かった。
- なぜ笑ってはいけないときがあるかを考えさせられた。
- 笑いには、どじ説、ズレ説、ホッと説など様々な説明があることを学んだ。
- なぜみんなそれぞれ笑いのツボが違うのか気になった。
- 友達や家族との会話など、笑いは人間にとって重要なものだと思った。
- 笑いだけでなく、様々な感情についても知りたいと思った。

- ベルクソンという人は、笑いと人間の進化には深い関係があるといったらしい。
- 自分で考える授業だと思った。
- 笑ってはいけないといわれると笑いたくなるのはどうしてか。
- 笑いは思ったよりも難しい問題だったが、新しいことも知った。
- 考えれば考えるほど疑問が増える。研究は疑問からはじまることが分かった。

以上のコメントから示唆されるように、この市民交流の活動は一定の有意義な成果をおさめ、その目的の大部分は達成された。

（大空小学校でのオープン授業の様子）

2.2 京都大学×大阪市大・文学研究科「哲学カフェ：人はなぜ笑うのか」

2016 年 10 月 30 日、京都市紫明会館にて、京都大学大学院文学研究科との共催による哲学カフェ「ひとはなぜ笑うのか」が行われた。本イベントは、京都をキャンパスとし、社会と海外に開かれた人文学のアクティブラーニングの場を提供することを目指す、京都大学大学院文学研究科プロジェクト「京都で学ぶ人文学」の一環として実施され、本研究科プロジェクトからは若手研究者が中心となり、笑いとユーモアをテーマとする話題提供を行った。プログラムは下記の通りである。

京大×大阪市大　哲学カフェ「ひとはなぜ笑うのか」

プログラム：

14:30～15:10　　佐金武　　（哲学・講師）

- ユーモアはなぜ哲学の問題になるのか

15:10～15:40　　高野保男　　（哲学・前期博士課程 2 年）

● 「絶対に笑ってはいけない」を考える

15:40～15:50　休憩

15:50～16:20　大畑浩志　（哲学・前期博士課程 2 年）

● カーニヴァル〈祝祭〉の笑い

16:20～16:50　小原漱斗　（心理学・前期博士課程 2 年）

● 心理学とユーモアの価値

16:50～17:00　ラップアップ

司会：

菊地建至（金沢医科大学／探 Q 複数の視点で考えるカフェ）

まず佐金武講師（哲学）から、「ユーモアはなぜ哲学の問題になるのか」と題して、ユーモア研究の概要とその哲学的意義について、参加型のアクティビティを通じたテーマの説明がなされた。これを受けて、高野保男氏（哲学・前期博士課程 2 年）は、「『絶対に笑ってはいけない』を考える」と題して、ユーモアと道徳の関係に関する独自の考察を展開したうえで、風刺画を一つの事例として取り上げ、ディスカッションのための問題提起を行った。次に、大畑浩志氏（哲学・前期博士課程 2 年）は、「カーニヴァル〈祝祭〉の笑い」と題したプレゼンテーションのなかで、ベルクソンとバフチンのユーモア理論を対比させ、バフチンの洞察のより深い理解のために、この理論に適合する事例の検討を参加者に促した。最後に、小原漱斗氏（心理学・前期博士課程 2 年）からは、「心理学とユーモアの価値」と題して、心理学におけるユーモア研究のアプローチについて説明があり、他者との共有によるユーモアの価値割引（および割増）という現象に関する興味深い研究成果が紹介された。

イベント終了後に回収されたアンケートの結果は次の通りである。まず、今回の哲学カフェが有意義だったかどうかを問う項目（「とても有意義・まあまあ・あまり有意義ではない」の 3 段階評価）に関しては、回収されたアンケート数 19 のうち、14 名が「とても有意義」と回答、「まあまあ」3 名、無回答 2 名という結果だった。また、今後もこのようなイベントに参加したいと思うかという質問（「そう思う・どちらでもない・そうは思わない」の 3 段階評価）に関しては、16 名が「そう思う」と回答、「どちらでもない」1 名、無回答 2 名という結果が得られた。

自由記述欄には、次のような肯定的評価が多く見られた。

● 面白かった。また参加したい。

- 時間および内容ともに適切。発言も活発にできた。
- 充実した時間をすごすことができた。笑いが人間性の理解に深く関わっていることを実感した。
- プレゼンテーションに触発されて、いろいろと考えることができた。

他方、今後の反省を促す、次のようなコメントもあった。

- プレゼンテーションの数を減らし、ディスカッションの時間を多くしてほしい。
- 発表が途中急ぎ足になる傾向があった。
- 発表者と参加者、あるいは参加者相互がもっと自由に話し合える雰囲気だとよかった。

以上の結果を総合的に判断すると、参加者の満足度は概して高く、市民交流の場での研究紹介としては期待以上の成果があったといってよいだろう。

（京大×市大「哲学カフェ」の様子）

2.3 文学研究科オープン・ファカルティ「参加型研究紹介」

2016 年 11 月 12 日、グランフロント大阪にて、本学の研究および教育を広く一般に紹介する目的のもと、「秋のオープン・ファカルティ：文学部の逆襲」が催された。本プロジェクトからは、哲学ブースでの午後の部において、若手研究者を中心に、「笑いが人間社会に存在する理由のアクティビティ」と題した研究紹介を行った。その内容は、笑いとユーモアに関する心理学的アプローチの発表 2 本、哲学的アプローチの発表 3 本で構成された。各発表タイトルは下記の通りである。

14:00〜14:20　　小原 漱斗　　（心理学・前期博士過程 2 年）
● 心理学とユーモアの価値
14:20〜14:40　　新居 佳子　　（UCRC 研究員）
● 自己卑下提示による「笑かし」
14:40〜15:00　　佐金 武　　（哲学・講師）
● ユーモアはなぜ哲学の問題になるのか
15:00〜15:20　　高野 保男　　（哲学・前期博士過程 2 年）
●「絶対に笑ってはいけない」を考える
15:20〜15:40　　大畑 浩志　　（哲学・前期博士過程 2 年）
● カーニヴァル〈祝祭〉の笑い
* 小原氏と新居氏が同内容の発表をさらに 1 サイクル実施し、16:20 に終了。

新居氏を除く研究発表は基本的に、京大との共催による前回の「哲学カフェ」を踏襲するものであったが、時間的制約もあり、参加者を巻き込むアクティブラーニングの要素は一部割愛せざるをえなかった。とはいえ、各発表者は聴衆の様子をうかがいながら、慎重に議論を進めていたといえる。今回新たに追加された新居氏の発表では、自己提示と自己卑下の二つの要素を含む、「自己卑下提示」という現象に着目し、発表者や参加者自身の体験をもとにした独自の考察が展開された。

他教室の研究紹介も並行して行われるなかでの実施であったため、アンケートの収集は参加者のごく一部に限られた。それでも、回答数 9 のうち、今回の研究紹介が有

意義だったかどうかを問う項目（「とても有意義・まあまあ・あまり有意義ではない」の 3 段階評価）については、「とても有意義」との回答が 5、「まあまあ」が 3、無回答 1 という結果が得られた。さらに、今後もこのようなイベントに参加したいと思うかという質問（「そう思う・どちらでもない・そうは思わない」の 3 段階評価）については、9 名全員が「そう思う」と回答した。

自由記述欄には以下のような意見が寄せられた。

- 哲学的知識がない自分にもとても分かりやすく、興味をひかれるものがあった。
- 実験や思考のプロセスを興味深く知ることができた。
- 日常では見過ごされることを研究対象とすることのおもしろさを実感した。
- 考える上での刺激になった。
- 研究の発想や視点が面白い。
- 堅苦しくない話題でよかった。
- 笑いだけでこんなに広がりがあることに驚いた。

ここから示唆されるように、参加者の満足度は高く、オープン・ファカルティでの研究紹介としても大きな成果があったといえる。

（市大「オープン・ファカルティ」プロジェクト紹介の様子）

2.4 文学研究科主催シンポジウム「笑いが人間社会に存在する理由」

2017 年 2 月 4 日、大阪市立大学学術情報総合センター1 階文化交流室にて、本プロジェクトの活動の締めくくりとなるシンポジウム「笑いが人間社会に存在する理由」が開催された。このイベントはこれまでの試みと同様、市民交流やアウトリーチ活動の一環としての意味合いも含んでいる。今回は外部講師 1 名をゲストに迎え、プロジェクトの教員メンバーが中心となって研究発表を行った。プログラムは下記の通りである。

13:00～13:10　オープニング

13:10～13:50　片岡 宏仁　氏　（言語学）

特別講演「それは仕様です」

13:50～14:30　高梨 友宏　教授　（哲学）

「近世哲学者は笑いをどのように捉えたか：デカルトおよびカントの生理学的説明とそのコンテキストについて」

14:30～15:10　仲原 孝　教授　（哲学）

「ニーチェにおける生の肯定としての笑い」

15:10～15:20　休憩

15:20～16:00　佐伯 大輔　准教授　（心理学）

「ユーモア刺激の価値測定：共有集団の種類と共有人数の効果」

16:00～16:40　山 祐嗣　教授　（心理学）

「適応としての笑い・あざけり：順位制への順守と反逆」

16:40～17:30　ディスカッション

ファシリテータ：新井　佳子　氏（心理学）

特別講演としてまず、最新のユーモア研究を翻訳し、国内に広く紹介した経験をもつ片岡宏仁氏により、その訳書の基本的アイデアが分かりやすく解説され、本研究テーマの学術的意義が参加者の間でしっかりと共有された。次に高梨教授は、ユーモアと

笑いが我々人間にとってどのような位置づけをもつかという美学的関心に基づき、カントやデカルトの哲学について独自の考察を展開した。これを受けて仲原教授はさらに、ニーチェの哲学における生の肯定としての笑いに着目し、皮肉と表裏一体である笑いの両義性がそこでどのような役割を果たしているかといった問題に触れつつ、笑いの多様な側面に関心を向けるよう促した。シンポジウムの後半では心理学のテーマにシフトし、種々の要因による報酬の価値の低下という現象（価値割引）に関して、佐伯准教授が指導する大学院生（本プロジェクトの小原研究員）とともに行った、ユーモア刺激を考察対象とする研究成果が紹介された。さらに山教授は、笑いに関わる特定の心のモジュールはおそらく存在しないとしつつも、様々なモジュールがそれぞれ笑いを誘発する不一致を検出すると考え、進化論的にいってそこにどのような機能が見出されるかという問題に関して、「順位制」と「あざけり」をキーワードに独自の議論を展開した。パネル・ディスカッションでは、フロアを巻き込む熱心な質疑応答が繰り広げられた。

土曜日の実施であったが、一般からも期待以上に多くの参加があった。回収されたアンケートを見るだけでも回答数 21 のうち、今回のシンポジウムが有意義だったかどうかを問う項目（「とても有意義・まあまあ・あまり有意義ではない」の 3 段階評価）に関しては、「とても有意義」との回答が 19、「まあまあ」が 2 という結果が得られた。また、今後もこのようなイベントに参加したいと思うかという質問（「そう思う・どちらでもない・そうは思わない」の 3 段階評価）については、「そう思う」が 19、「どちらでもない」が 2 という結果であった。

自由記述欄には以下のような意見が寄せられた。

- 研究紹介・導入としても興味深いものだった。
- 普段は意識しない笑いという現象について、改めて深く考える機会を得た。
- 一つのテーマに対する学際的な議論がとても面白かった。
- 今後もこのようなシンポジウムを続けてほしい。
- とても分かりやすく、おもしろかった。飽きずに聞くことができた。
- 休憩時間がほとんどなく、タイトなスケジュールだった。
- 領域の異なる研究者同士のディスカッションをもう少し聞いてみたかった。
- シンポジウムのタイトルにもある社会性のテーマがやや希薄であると感じた。

以上のように、参加者の満足度は非常に高く、市民交流あるいはアウトリーチ活動の

一環としても大きな成果があったといえるだろう。

（シンポジウム発表とディスカッションの様子）

3. 総括および展望

メンバーの正式な決定後、本プロジェクトの活動は 1 年にも満たないごく短い期間ではあったが、市民交流やアウトリーチ活動としては当初の期待以上の大きな成果があったといえる。このテーマの学術的意義については内外で十分に共有することができたので、今後はこの経験をもとにさらに活動の幅を広

げ、研究内容を一段と深化させる必要があるだろう。今後の方針についてはまったくの未定であるが、この活動が各メンバーの研究において何らかの実を結び、さらなる共同研究への礎となることも期待しつつ、ここでひとまずプロジェクトの終了を宣言する。